



日本記者クラブ

研究会

「消費税はなぜ嫌われるのか？－死屍累々の教訓」①

大平正芳と一般消費税

森田 一

大平首相首席秘書官

2010年8月3日

参院選挙で民意はまたもや「消費税はノー」との判定を下した。どうして消費税はこんなに嫌われるのか。過去の教訓は果たして生かされているのだろうか。素朴な疑問から消費税政局の渦中にいた方々をお呼びして証言と提言を聞くことにしました。

第1回目が大平首相秘書官の森田一氏。大平氏と一心同体で歩んできただけに、等身大で深みのある大平ヒューマンドキュメントを展開していただきました。森田氏によると、クリスチャンの大平氏にとってすれば、蔵相時に戦後初の本格的な赤字国債を発行したことが「一つの十字架（原罪）」になっていた、ということです。ただし、首相となって一般消費税を打ち出したものの、衆院選直前に周辺から反対され結果的に取り下げざるをえなかった。結果的に選挙は大敗し、大平氏は40日抗争で命をすり減らすわけですが、森田氏は、「あの時、（一般消費税を）断念しない方が、大平の政治人生にとっても、選挙にとってもよかった」と回顧されていました（企画委員・司会 倉重篤郎毎日新聞論説室専門編集委員）。

< I > 大平正芳と私

(1) 初当選から辞任まで

きょうは、倉重さんのほうから、「大平正芳と一般消費税」ということについて話をしろというお話でございますが、この話に入る前に、2点ばかりお話しさせていただきたいと思えます。

といいますのは、私は、少年時代に吉田内閣の末期に立ち会いまして、各社の新聞の論説が、吉田さんが一日も早く退陣されることが最大の国益である、というようなことが連日書かれておったのを記憶しております。

私が申しあげたいのは、大平内閣の末期も大同小異であったという点が第一点。それから後ほどお話するように、大平総理の人柄というのはなかなかわかりにくい点がありました関係もあったんでしょうが、当時のいわゆる“三角大福中”の中では一番人気がなかった。この2点を念頭に置きながら以下の話をお聞きいただきたいと思えます。

最初に「大平正芳と私」でございますが、私自身のことにつきまして、昭和55年6月22日に初当選をいたしましたわけでございますが、実は6月12日に大平総理が他界をいたしまして、運動期間は1週間だったわけでございます。1週間の運動なんですけど、まあ、報道されたこともありまして、報道陣と一緒に運動でございましたので、16万1,546票という大量得票を得たわけでございます。そのときに一緒に寝泊まりした記者の一人が、後ほど癌の闘病で有名になる逸見政孝さんでございます。

そんなことで、これがいかに大量得票かという事は、全国一の得票率でもありましたし、また大平総理自身が幹事長のときに9万6,000だったわけです。総理になって12万3,000だった。私は1週間で16万1,546票。それ以来、連続8回当選させていただきまして、運輸大臣兼北海道開発庁長官もやらせていただきましたし、また、25年の表彰も受けました。

25年の表彰を受けたときに、この辺でちょっとおいとまするべきかなと思ひまして、私自身も、初当選のころから、どういう形でどうい

うふうにやめるかということはずうっと考えておりましたので、家内にはあまり説明しなかったんですが、スパッと決めまして、やめました。

そんなことで、きょうは、私は何にも肩書がありません。肩書のない私が皆さん方にこうやってお話しさせていただけるというのを大変光栄に思うわけでございます。

(2) 大蔵省入省と結婚

その前の話になりますが、私は大蔵省に昭和32年に入省いたしました。そのときは大臣官房文書課というところに入省したのですが、これは福田赳夫さんが入省した課でもあり、それからそのときの課長の谷村裕さん、筆頭補佐の竹内道雄さん、次席の補佐の大倉真隆さん、いずれも事務次官になっておりますから、そういう意味では大変名門の課でございます。

その前に大平と知り合いになっていた関係で、推薦もあってその課に配属になったと思ひますが、私がそもそも大蔵省を受けようと思っていたのは、辻清明さんの『日本官僚制の研究』に大変感動いたしまして、大蔵省へ入って中から官僚制を変えようという大志を抱いておったわけでございます。

その大志は、文書課に配属になって、仲間を募るといっても、非常に募りにくいという状況であって、後ほどお話ししますように、大平官房長官の娘と結婚することになりまして、そのような志を捨てまして、普通の大蔵事務官として勤務したわけでございます。

見合いでも恋愛でもない錯覚結婚

結婚の話でございますが、私はちょうどメルボルンに行ってまいりましたときに、大平の選挙区であります坂出市というところの責任者から、「週刊現代」の最後のページのグラビアが送ってまいりまして、それまでに大平邸に行っていましたから、いまの家内とも顔見知りではあったんですが、当時19歳ですから、まさかそんな結婚の話なんて出ると夢にも思っていなか

ったのですが、「この写真の大平さんのお嬢さんがあなたを好きでしようがなくなっているから、結婚しないか」と書いてあったわけでございます。私は、それほど好きになってくれるならと思ってオーケーしたのですが、これは全く仲人口でございまして、大平の娘のほうにも同じようなことをいっていたようでございます。

そういうわけで、私の結婚は、見合いでもないし、それから恋愛でもないし、“錯覚結婚”というようなものでございます。両方が、相手が自分のことを非常に好きだというふうに思い込んで結婚してみたら、そうでもなかったけれども、まあ、いま何とか無事でやっております。

そんなこともありまして、その後、私は大蔵省で23年勤めさせていただいたわけですが、そのうちの8年間は外務大臣の秘書官2回、大蔵大臣の秘書官、総理大臣の首席秘書官ということで、8年間は岳父大平の秘書官生活だったわけでございます。

(3) 秘書官ではない時代

それでは、秘書官でないときはどうかといいますと、そのときも大蔵省で勤務しながら、朝7時には、すぐ近所が私の家であったので、「おはようございます」といって、顔をみれば、前日、何時間寝たかなと見当がつくような感じでございました。

それから、秘書官でないときはゴルフのお供が重要な仕事でございまして、スリーハンドレッドクラブへ行くことが多かったのですが、とにかく無役のときに、当時、記録をつけていたのはっきりわかるのですが、土曜、日曜、祭日、夏休み、冬休みを全部使って年間104回ゴルフ場へ行ったことがございます。

それからもう一つはあるカントリークラブで台風の真ただ中にゴルフをやりまして、もちろん我々の組1組だけで、同じように回っている人が「大平さんに何とかやめるようにいってくれないか」というのを、「いや、とにかくハーフだけは回るんだ」ということで、回りました。

そういうことで、大平のそばにずうっとつ

た生活をしておったのですが、いいことばかりではございませんで、さっき申しあげましたように、初当選から運輸大臣もさせていただいたし、8回連続当選もさせていただいたのですが、私は谷垣派にいましたので、谷垣派の人たちによく「いま、私の余生だ」ということをいったら、「余生で8回連続当選して、大臣にもなって、25年の表彰を受けるんか」と川崎二郎さんからいわれましたが、「そうだ。私の心境としては余生という感じだ」。そのぐらい秘書官に全力投球をしたということでございます。

(4) 長男正樹の世界

私は、最初に池田内閣の外務大臣の秘書官でありましたが、そのときはまだ長男の正樹というのがおりまして、この人がいずれ跡を継ぐということになって、私は政治にかかわるということを全く考えておらなかったのですが、この長男が世界旅行、視察旅行に出て、帰ってきてちょっと調子が悪いということで、私の母が当時、香川で眼科の医者をしておって、診察いたしますと、眼底出血しておるということで、これはちょっと容易ならざることだということで、東大病院に入院したのです。

その当時は病名がわからなかったのですが、いま厚生労働省のほうで難病指定になっておりますベーチェット病で、若い男の人がかかると一番重いという病気でございますが、まさに大平正樹はそういうようなことで、26歳で他界したわけでございます。そんなことで、私がおのち、秘書官もやり、跡を継ぐということになって、運命が変わったわけでございます。

<Ⅱ>大平正芳とはどういう男だったのか

(1) 神の存在

以上で第一の「大平正芳と私」というのが終わりまして、その次、大平正芳とはどういう男だったか。まず第一に申しあげなければいけないのは、佐藤定吉というエンジニアで、かつクリスチャンが来まして、「科学と宗教」という講演をしたわけですね。これに大変感動いたしましたし

て、それでクリスチャンになるわけでございます。クリスチャンとしては、無教会派のクリスチャンではあるのですが、大変熱心でございまして、大道で説教をしたり、いろんな運動を一生懸命やっておったわけでございます。

そして、そもそも私だったらそういうことを考えられないような感じがするのは、佐藤定吉さんの発明を事業化して、これでもうけて、そのもうけを全部キリスト教に寄付しよう、これに一生費やそうということで、2年間一生懸命やった。ところが、なかなかうまくいかないの、佐藤定吉さんのほうから、「その事業の事業化はもうやめてくれ」といわれまして、ある意味でしようがなく、それでは、一橋へ行くかということで、たまたま受験して、合格して一橋へ行ったわけでございます。

したがいまして、大蔵省の同期よりは3つぐらい年上でございまして、風貌のせいもありますが、同期生、特に後輩の人たちから「大平さん」とはめったにいられないで、「お父ちゃん、お父ちゃん」といわれていたわけでございます。

大平は、そういう意味で、神の存在というのを常に意識しておりまして、これがまた国民にわかりにくくなる原因の一つだと思っておりますが、私も共通の面があるのですが、人がどう評価しようと、神の目からみてどう評価されるかが肝心だ、という意識が常にあるわけでございます。

(2) 楢円の哲学と永遠の今

その哲学はどういうものであったかという、大きくいいますと、「楢円の哲学と永遠の今」とそこに書いてあるようでございますが、結局、物事を複眼でみたいと。イデオロギーというのは、どっちかというと単線でないで成立しないから、イデオロギーというのは、右も左も嫌い。楢円は中心が2つあって、1つの中心から物事をみて、もう一つの中心から物事をみて、初めてこの世の中のことがちゃんと理解できるんだという考え方でございます。

それから、「永遠の今」というのは、現在の一瞬は、過去、悠久の昔から連なる現在であり、また、永遠の未来に連なる現在の一瞬だ。それ

だけ大事だということですが、大事だということだけでなく、そういう哲学的意味を持っているんだということの認識であったわけでございます。

(3) 三つの十字架：日中国交正常化

大平総理は、生涯3つの十字架を背負っております。第一は、池田内閣の外務大臣の秘書官のときに、私もいたのでよく覚えておるんですが、「日中国交正常化の将来はどうか」と聞かれました。「中国が将来、世界各国から祝福されて国連に加盟するような事態になったら、日本も真剣に日中国交正常化をしなきゃいかん」ということをいったわけでございます。

当時として、その答弁自体はそう目新しいものではないのですが、大平自体がその日から、とにかく日中国交正常化をいつやるかということをも毎日考えるということで、第一の十字架というようなことになったわけでございます。

これが幸い、昭和47年、田中内閣のときに外務大臣として9月25日に訪中して、29日までの間に正常化がなされたわけでございますが、交渉自体は田中総理から任されていることもありまして、大平外務大臣と周恩来首相との間でほとんど詰められたわけでございます。

この話は一部しか知られておらないんですが、田中角栄さんのそのときの交渉の最大の関心は、上海に行かなきゃいけないか、上海をオミットできないかと。周恩来にとってみれば、当時、四人組の張春橋がいましたので、どうしても行ってもらわなきゃいかん。だから、私の専用機を使って、私も一緒にお供しますから行ってください、ということになった。

これは世の中に全然出てないのですが、官邸での会議の中の相当部分が、「宴会が1時間以内に終わらないか」と何回もいまして、「1時間以内というのはちょっと無理ですね」ということで、1時間以内にはならなかったんですが、中国側としては極力短い宴会にしたわけです。

話はさかのぼりますが、田中内閣が成立するときに、角栄さんにとっては、大平の十字架とは違って、総裁選の最大の柱だったのです。三

木武夫さんが、日中国交正常化を田中角栄さんがやるんだったら支持すると。だから、当然やるということで、やったわけですが、そういう意味で、あの決断の早い田中さんが9月25日の訪中を決めるときには、「ちょっと考えさせてくれ。これ、失敗すれば退陣しなきゃいかん。7月に内閣成立で、9月に退陣というのは短過ぎるじゃないか」。「いや、必ずそれ、成功させますから」ということで、かなり大平がせっついて、「それじゃ、行こう」ということになったわけですが。

そんなことで、日中国交正常化は、田中角栄さんにとってと大平にとっての意味が違ってあったわけですが、いずれにしても、これについて批判的な意見もありますが、大筋としては、日中国交正常化をあの時点でしておいて正解だったと思っております。

(4) 核の密約

それから核の密約が第二の十字架でございまして、これはさつき倉重さんのほうから話がありました。沖縄の密約は大平総理には全く関係なくて、私が事務官として関係しておりました。実はあのとき、西山太吉さんが問題にしたときに横路さんが質問したのですが、西山太吉さんと大平は親類だった関係で、大平が倒閣のために利用したんじゃないかということがうわさとして一時流れたのです。実は私が沖縄に出張して400万ドルを決めてきたんですが、400万ドルを決めてきたということを一言も大平に聞いておりませんし、400万ドルの話は全然知らないまま他界したわけですから、そんなことはあり得ないわけですが、そういううわさは、やがて消えました。

そんなことでありますが、大平にとっての十字架は、池田内閣の外務大臣のときに、ライシャワー大使が訪ねてまいりまして、それまでライシャワーさんとは親しかったものですから、外務大臣ではあるんですが、外務省の付属施設である霞友会館というところで時々会っておったのです。あるとき私のほうに秘書の方から連絡があって、公邸でお会いしたいと。これ、何

かあるなあという気がしたわけですが、その会談後も大平大臣は何にもいいませんから、私もわからなかったのです。

イントロダクションのつぶやき

その次に、スリーハンドレッドに行く途中で何か考え事をして、小さな声で「イントロダクション、イントロダクション」と二度ばかりつぶやいたので、あ、これは核の搭載の話だったんだなということに気がつきました。

その後、時間がたってから私も説明を聞いたのですが、結局、その真相はよくわからないんです。昭和35年、安保の改定するとき、藤山外務大臣とマッカーサー大使との話のときに、この話は非常に微妙で、両方ともが頑張ると安保の改定の条約交渉そのものがだめになる、ということだったのだろうといまは想像しておるんですが、両方の事務当局が大臣と大使に上げてないと。だから、その議事録をみたんですが、一切核搭載艦の寄港問題は議論してないのです。

そこで、日本は、「核搭載艦が寄港するときには事前協議がある。事前協議がない以上は寄港してないんだ」というし、アメリカは、「そんなもの、事前協議は必要ないんだから、当然、寄港は自由だ」。

ライシャワーさんが訪ねてきたのは、池田総理が「日本には核搭載艦の寄港はありません」ということをはっきり国会でいったので、アメリカ政府が不安を抱いて、ライシャワーさんに「一遍、大平さんと会って話してくれ」と。

大分時間がたってから聞いたんですが、大平はライシャワーさんに「アメリカの解釈は正しい。事前協議、一々そんなのを取り上げるのは無理だ。日本側のほうは、私が何とかちゃんとやるから、だれにもいわないでくれ」ということで、一生懸命考えていたんですが、大平総理は、そのときは自分が一生懸命やれば何とかなると思っていたのですが、当時は冷戦の時期ということもあって、なかなか名案が浮かばない。

一番最後は、亡くなる年の55年4月に、大平総理と伊東正義官房長官と加藤紘一副長官と

私、4人がたまたま執務室で一緒になる機会があって、これは貴重な機会だからいろんな話をしようということで、話をしているときに大平総理が「例の核の問題、国民にわかってもらえる方法、何かないのかね？」というから、私がそのときパッと思ったのは、それを大平総理が弁明したら、福田前総理とか三木総理がうそをついているということになるから、それは絶対だめだということで、「それはもう無理でしょう」ということを強く話したのです。伊東官房長官も加藤副長官も「やっぱり無理だ」と。「いや、大体難しいから君らに聞いているんだ」ということで慥然として、もうその話は二度と持ち出さないまま6月に他界したわけでございます。それが第二の十字架。

＜Ⅲ＞ 財政問題と一般消費税

(1) 蔵相就任

第三の十字架がこれからの本題であります一般消費税の話なんですが、大蔵大臣に就任するのは、いま国交正常化の話をしましたが、そもそも田中内閣ができたときに、内政は田中で、外交は大平という分担で行こうということでやっておったんですが、昭和49年に参議院選挙があって、福田さんにしてみれば、昭和47年に日中国交正常化の余勢を駆って12月に解散をするんですが、それが思ったような成績を上げられなかったのです。このときの思いが遂げられなかったのが、今度の参議院選挙だけは絶対勝ちたいという思いで、ヘリコプターを使って全国飛び回ったんですが、当時の新聞は、金権選挙とか、あるいは企業ぐるみ選挙というような批判もありまして、8議席減という大変な成績で終わったわけでございます。

いまも、さきの参議院選挙の関係で菅総理が批判、追及されておりますが、そのときの追及は、はるかに党内での厳しい反応でございまして、三木副総理と福田大蔵大臣が辞任したわけであります。

当時、もう経済はすでにおかしくなっておりましてから、田中総理の懇請によりまして外務

大臣から大蔵大臣に横滑りをしたわけでございます。

(2) オイルショック

その前にオイルショックがあって、石油の価格が4倍になっておって、そして物価は狂乱物価というようなことで、これをどうするか。福田大蔵大臣は、緊縮予算を組んで引き締めをやってこの狂乱物価を抑えようということになったのです。ところが、大平が大蔵大臣になるころには、物価は上がるけれども景気も悪くなる、スタグフレーションの典型的な状況になってまいりまして、緊縮予算一点張りでもなかなかいかないという情勢であったわけでございます。

田中内閣の大蔵大臣は4カ月と10日で終わりました。次は、椎名裁定を受けて、三木内閣が成立しまして、三木内閣での蔵相に留任したわけでございます。

ところが、このときに大変な問題は、福田赳夫さんが経済企画庁長官で入閣をしたわけであります。したがって、大平大蔵大臣の思いどおりにはなかなか経済を動かさない。特に公共料金については、大平は、そもそも自分の考え方から、公共料金、なるべく自然体のほうがいいんだ。凍結とか何かやってみても、後での引き上げ幅が大きくなるだけだという哲学だったんですが、福田さんは、それでは政治は何をしているかわからんんじゃないかということで、結局、公共料金の凍結で赤字幅もふえたわけでございますが、大平総理の性格上、その後の赤字国債の発行の金額もふえるんですが、「福田さんのせいで赤字国債の金額がふえた」ということは一言もいっておりません。赤字国債の発行は、あくまで大蔵大臣の責任だということでありませぬ。

(3) 大平正芳の経済や財政の見方

その次に、簡単にお話ししますが、大平の経済や財政の考え方はどうかということになるわけでございますが、一番はっきりしておるのは、当選間もなく書いた『財政つれづれ草』とか『素顔の代議士』という本の中にはっきり出ている

のです。大体物事というのは、人間の本性に従って判断しなければ真実はわからない。自分のお金は大切にす。次は会社のお金。国や地方公共団体のお金は一番大切にしないというのが人間の本性だ。そうだとすれば、できるだけ税金を取るのを少なくして、そして、いまのいわゆる“小さな政府”論の先駆者であります、そういうことを書いてある。

私は、そのときに、この人、ケインズのことを知らないんじゃないかと思っておったんですが、後にいろいろ話を聞いておりますと、『雇用・利子および貨幣の一般理論』も読んでおられますし、ケインズはいいんだけど、不況のときに財政支出をドンとふやすのはできる。けども、好況のときにそれに見合った財政支出を減らすというのは、人間の本性からできるかね？ ということで、なるほど、この人は、やっぱりケインズのことをわかったうえでいつているんだなということが初めてわかったわけでございます。

(4) 省議の連続

そんなことで、話がちょっと余談になりましたが、大蔵大臣として、赤字国債というのは大平の一番嫌うところでもございましたから、赤字国債をできるだけ少なくしたいということで、省議の連続だったわけでございます。

しかし、会を開くたびに赤字国債の金額がふえていく。赤字国債というのは、大平のとき最初に発行したのではなくて、昭和40年、福田大蔵大臣が40年不況に対処したときに、財政法4条で認められておる建設国債でやろうとしたんですが、どうしてもちょっと足りないということで、若干の赤字国債を発行しておるのです。したがって初めてではないんですが、福田さんもそのことをいいませんし、それから世の中も、福田さんのときに赤字国債をちょっと出したということはほとんど知りませんで、大平さんのときに初めて出したという理解が一般的でございますが、そういうことで、赤字国債もやむを得ないということになったわけでございます。

(5) 赤字国債発行の決断

それから、さっきの話が長い話になるんですが、結局、財政法4条で禁じられていますから、特例法を出さなきゃいかんと。大蔵省の事務当局は、当然のことながら、翌年度以降も赤字国債が予想されるわけでございますから、財政法の特例法の一般法を出したい。大平は、それは絶対だめだ。毎年毎年苦勞することによって少しでも赤字国債を減らそうというようなことの思いを致さなきゃいかん。これは相当すったもんだやりました。

事務当局は、ほとんど特例法の一般法の説であつたんですが、中には大平さんのいうほうが正しいという人もおりまして、最終的には毎年出すことになって、今日まで続いておるわけでございます。

この点は大平総理が非常にこだわった点でもございまして、赤字国債は、省議の連続の結果、やむを得ないということはわかったけれども、特例は毎年出すんだということで押し切ったわけでございます。

(6) 財政再建の決意

それを押し切ると同時に、自分のこれからの人生はよくわからないけれども、一生かかってこの償いをする。財政再建をやる。自分はどんなつても構わない。とにかくやるんだ。まさかその後に総理になるということは、そのときは考えておりませんが、どういう立場にあつてもという決意をするわけでございます。

一方、事務当局は、赤字国債がこれだけ出たら大変だということで、当然ながらヨーロッパの付加価値税みたいな議論がなされておりました、実は54年に政府税調の答申が出るわけでもございますが、大蔵省事務当局として安心できないのは——10日に自民党税調で事務局長をやっていた野田先生が来てお話しただけのように聞いておりますが——自民党税調というのがありまして、こちらが力を持っているのです。いかに力を持っているかということは、私は、その当時、新聞であれ？ と思ったんですが、山中貞則先生が自民党の税調の会長だったとき

に、記者の人が「自民党税調は政府税調を軽視しているのではないか」といったら、「いや、自民党税調は、決して政府税調を軽視しておりません。無視しているんです」という答えだった。

それがいかにもその実態によく合っているようでございますから、したがって、大蔵省の事務当局としては、政府税調のほうからそういう答申があっても、全然心休まらない状態だったんですが、大平内閣ができたということは、一般消費税をやってくれるのではないかということで、当時の長岡實さんとか水野勝さんとか、お話を聞きましたが、大喜びしたそうでございます。

<IV> 政局と一般消費税

(1) 総裁選と大平内閣の成立

以上で3番目が終わりました、今度、「政局と一般消費税」というのは、政局に絡んで、解散と絡んでいました。総裁選は、皆さん方ご存じのいわゆる密約というのがあったのです。福田、大平、園田、鈴木善幸と立ち会いが保利茂。皆さん方は意外に思われるかもしれませんが、密約なんかをつくったって、そんなもの、しょうがないのではないかというのが大平の立場で、「別に文書化しなくてもいいんじゃないか」と大平がいったら、福田さんが「いや、どうしても文書にしてくれ」と。

「文書にしてくれ」というのは、後で大平に譲るということを密約で文書にすることを望んだわけではなくて、第1項のほうに、「次の首相首班指名選挙において、福田赳夫を大平は推挙する」と書いてある。それを文字にしたかったのだろうと私は想像しております。いずれにしても、福田さんの熱心な主張によって文書化されて、2年後には大平に交代ということなんです、最終的にはこれは無視されるということになったわけでございます。

この密約は、最初から「そんなもの、文書にしたってあまり意味がない」というふうに大平もいっておった関係で、大平幹事長もあまり当てにはしておらなかったんですが、ただ、大平

幹事長が、政局のことも含めまして、野沢の福田邸に行きまして——3~4回私もついていきましたが——そのときに毎回いうのは、「僕は絶対総裁選に出ない。総裁選には君の推薦人になるということをいうんだよ」と。そのことは大平から聞いたわけじゃなくて、最後のときに、大平が玄関を出ようとして、私が迎えに行くと、福田さんが「例の推薦人の話はもう間違いないからね」というふうな話がありました。

それからどのぐらいたったんでしょうか、福田さんから電話があつて、私はその場ではわからなかったんですが、見る見るうちに顔が紅潮しまして、「福田君のほうから、派内がどうしても抑えられないから、やっぱり総裁選に出るといふ電話があつたんだ」と。それからご存じのように田中派から全面的な支援を得まして、後藤田さんの活躍もあつて、東京でも第2位に入って、予備選挙で大平幹事長が748票、福田総理が638票で、大平内閣の成立が決まったわけでございます。

本当は本選挙があるんですが、福田さんは予備選挙の最中に、「予備選挙で負けた者は本選挙を辞退すべきだ」ということを何回もいっておりました、それを守って本選挙に出なかったから大平内閣が成立したわけでございます。

(2) 解散のカード

大平内閣が成立して最初に官房長官を決めなければいけません、伊東正義先生は従来の盟友でございますから官房長に考えておったんですが、ところが、田中六助先生が前尾さんに承継するときに、「私は、前尾さんのもとの宏池会におれないということで1年間宏池会を脱会しているんだ。私は最大の功労者じゃないか」ということもいいましたし、第一、寝室に入らないんですよ。それで、どうにもしようがなくなって、それでは、1期先輩でもあるし、田中君を官房長官にするかということで決まったのです。

田中六助官房長官が最後まで誤解して、その誤解が解けなかったのは、私がそばにいて、人事についても大平に対して何かいっているとい

うふうに思い込んでいたらしいんですが、私は、そういう人事とか何かについて一切口を出したことはございません。細かい問題について、大平総理がこれを考えているなどと思ったら、その前に、「これはこういうふうにしたほうがいいんじゃないですか」ということで、細かい手続を省略したことは多々ありますが、大きな問題について口を挟んだことはありません。

それから2番目は、鈴木善幸さんを当然、幹事長と考えておったんですが、福田さんが絶対反対なのです。鈴木善幸さんも「あそこまで福田さんが反対されるんだったら、私は辞退しましょう。そのかわり斎藤邦吉さんを幹事長にしてくれ」と。それで、大平総理は私に「斎藤邦吉君をすぐ呼んでくれ」と。ところが、もう政局の最中ですから、大平邸の周りを十重二十重、新聞の方々、皆さん方だったかどうかわかりませんが、とにかく囲まれているわけです。

どうやって呼んでくるかということで、私が一計を案じまして、私の宅が近所にありますから、斎藤邦吉先生にそこへ来てもらって、警察官を1人呼んでまいって、その服装を全部借りて、斎藤邦吉先生が警察官の格好をしたのです。それで、悠々と私と一緒に大平邸に入ったわけでございます。そこで本人も承諾して、斎藤邦吉幹事長が決まったということでございます。

それから解散の話になるんですが、そもそも解散というのは福田内閣のときからの大問題でございまして、先ほど申しあげましたいわゆる密約の問題を公然と破棄できるということは、解散をして、福田内閣が大勝すれば、当然、福田さんが引き続きやるべきだということになるんですが、それは困るということもあったでしょうし、それから前の選挙とあまり空いてないんですね。それも含めまして、大平幹事長は絶対反対で、福田内閣は解散できなかったのです。逆にいうと、その後の大平内閣は解散権を持った内閣の成立だということになったのです。

「小泉は解散する」と確信

余談になりますが、解散について、常に私の

念頭にありますのは、三木おろしを福田さんと大平とでやっておって、そのときに三木さんが、大平大蔵大臣も含めて14人の閣僚を首にして、そして総理が兼任して解散しようとしたことがございます。ただ、最後の一縷の望みということで、大平は中曽根幹事長のところへ行きました、極秘で会いまして、「それはちょっと乱暴じゃないか、反対してくれ」ということで、中曽根さんもそれは反対だということで、三木さんは解散できなかったわけでございます。

その後、任期満了選挙で成績がよくなって退陣することになったのですが、それをつぶさに見ておったのは小泉純一郎さんなのです。だから、閣僚は署名しなくても何でも大丈夫だ。幹事長が「解散は絶対反対」といったら、福田内閣のときも解散できなかったし、三木内閣のときもできなかったの、幹事長を選ばにやいかんということをお泉さんは考えているなどということをお泉さんは思っ、だれを選ぶのだろうかと思っ、一生懸命想像していたんですが、ちょっと思い当たらないのです。そのうちに武部勤さんの名前が出た。あ、これこれと思っ、逆にいえば、武部さんを幹事長に選任したときに、小泉さんは絶対解散すると。それで、郵政に反対するものは絶対公認しないと。

これは私にとっては自明の理みたいな話で、私だけがそういうのをわかっているよりは、親しい人にはその旨を話したほうがいいんじゃないかということで、昔、こんなことがあって、こうだという話をしまして、私が話した人はすべて公認を得て、すべて当選しました。

(3) 解散の決断

そんなことで、解散カードを持って大平内閣は成立しまして、で、解散時期をいつにするか。そのときに公約をどうするか。一般消費税につきましては、ちょっと順序を逆にしますが、実はこんなことがあったのです。大平内閣が成立したときに、これは私の想像で、当たっているかどうかわかりませんが、皆さん方ご存じのように、宮澤さんと反りがよくないですが、総理大臣になったんだと。そうすると、国民の

ためにも宮澤君の知恵も活用すべきだと大平は考えたのだらうと思います。とにかく10項目のメモを書きまして、「宮澤君のところへ行ってこれを聞いてきてくれ」と。その第1項目が、12月に内閣が成立したのですが、1月4日に閣僚を連れて伊勢参りをしなきゃいかんだけれども、自分は熱心な無教会派のクリスチャンだけれどもそれは差し支えないかということで、それからずうっとあって、最後が一般消費税というか、ヨーロッパ型の付加価値税を考えているんだけれども、これについて意見はどうかと。

1~9項目までは、宮澤さんの意見はイエス、問題ない。最後は、選挙を考えるんだったら、ちょっと問題じゃないですかということで、私は大平総理にその旨を反対したんですが、当然のことながら、一般消費税を掲げて解散することについては、党内も、それから宏池会の中でも大変な反対がありました。斎藤幹事長につきましても、党内を代表して反対しますし、それから特に反対が強烈だったのは、元主税局長の塩崎潤先生は気遣いみたいになって反対されました。それから19年間大平の秘書をやって、そのとき参議院議員になっていた真鍋賢二先生も反対しました。

ただ、田中六助官房長官は、大平の一般消費税に対する思いが強いから、賛成ともいいませんでした。あまり発言しませんでしたし、私も何も意見をいいません。

大平総理は、そのときに反対の人というのは、「国民は賢明だから、一生懸命ちゃんと説明すれば必ずわかってくれる」と。わかってくれるということは、自分を納得させるためでもあったんでしょうが、うちの家内とか志げ子夫人とか、みんな家族にも、「ちゃんとわかってくれるよね。そうだよ」ということはたびたびいつています。本当にそれはわかってくれるんじゃないかと期待しておったのではないかと思います。

(4) 総理大臣秘書官

ここからまた横道に入りますが、私のそのときの立場というのは、先ほど秘書官の話をし

ましたが、総理大臣の秘書官というのは5人いるのです。一つは、政務の首席秘書官。その次は大蔵の秘書官、通産の秘書官、外務の秘書官、それから経産の秘書官。ところが、大平総理は、大平内閣ができたときに、「秘書官の選任はおまゑに任せるけれども、政務の秘書官と大蔵の秘書官を兼ねてくれ」といった。飯島さんみたいな立場と——私はそれほど能力がありませんが——大蔵の事務の秘書官というのは、事務の取りまとめをしなければいけないので、「それはいかんでしょ」といったら、そのときに説明しませんでしたけれども、おそらく大平の頭の中に一般消費税があって、それを大蔵省といろいろ連絡するときに気心の知れた森田がいいんじゃないか、というふうに考えていたのと、私は全く想像してなかったのは、1つポストをあけておいて、議員会館の秘書を、3カ月ごとに辞令を出して、全部総理大臣の秘書官にしたのです。だから、いま地元で市長をやったり、町長をやったり、県議をやったりしていますが、全員が総理大臣の秘書官経験者と。全然官邸にこないんですけども、辞令はそのとおり。そういうことをしてやりたいということもあったのだと思います。

1つあいているものですから、そこへしょっちゅう総理の執務室から大平総理が出てきて秘書官の席に座っているんですね。私は首席秘書官ですから、面会人が私のところへ来て「総理にお目にかかりたいんですが」といったら、「ここにいるよ」とかいて、後ろのほうで声がするというのはたびたびありました。

(5) 一般消費税

そんなことで、結局、一般消費税を掲げて戦うわけですが、ご存じのように、なかなかうまくいかない。

私にとって非常に残念なのは、選挙になったときに、私は大平の代理で地元で演説しなきゃいかんからいかなかったのです。選挙は、わかってきていると思っているのが、国民はなかなかわかってくれないというような状況にもなるし、おまけに10日ぐらい前に鉄建公団のスキヤ

ンダルがありました。そのときは大平総理も予測してなかったのですが、選挙の当日が大雨だったということもあります。選挙は非常に不利になってきて、当時の水野勝主税局長の話なんかを聞きますと、「とにかくこのままでは負ける。それで大平さんを説得しなきゃいかん」ということで、斎藤邦吉幹事長とか、何人かが毎日のように大平さんのところへ押しかけて、「あきらめんでいい。一般消費税をやりゃいいんだ。ただ、1年延ばしてくれ。その前に行財政改革をやるということをしてくれ」ということで、大平もしょうがないかなということ、そうしたのです。

しかし、新聞とかテレビは、まず「行財政改革」という一言をいったら、もう断念ということで、ワッと広がりまして、それで、断念しなくても負けていたのですが、大平の一生涯からいえば、断念しないまま投票日を迎えたほうがよかったと思うのですが、私はそばにいなかったし、これだけ大きな問題ですから、私が口を挟んでなかった可能性も大きいのですが、とにかく不本意な結果になったわけでございます。

<V> 教訓と課題

(1) 今後の困難

以上で大平正芳と一般消費税の話は終わらせますが、まだ10分ぐらいありますので、私、税の専門家でございませぬので当たっているかどうかわかりませんが、いくつかの感想を述べますと、まず第一に、消費税は、1%が2.5兆円なんです。ところが、政治的には2.5兆円という重みではないのです。もっともっと重いのです。そここのところの問題は永久に解決しない問題じゃないかなと。

結局、私が考えておりますのは、政策的にそういうことはいえないのかもしれませんが、とにかく借金がこれ以上ふえないという状態を一定年限つくって、それを継続させている間にデフレを解消して物価上昇すれば、1,000兆の借金があつたとしても、5%物価が上がれば

50兆返済したのと同じですから、1%2.5兆円とは全然問題にならないわけです。

当たっているかどうかは別にして、いずれにしても、デフレを解消して物価上昇で実質的に債務が減と。その前提には、これ以上借金がふえませぬという状況をいろいろ苦勞してつくりたいと話にならないわけでございます。第一点は、そういうことだと思っております。

それから菅さんの話で、いままでの経緯もありまして、一般消費税の話、売上税の話、それから竹下さんの、消費税の成立のときの話、それらの経緯もすべて含めまして、今後の消費税というのはなかなか大変だなという感じがいたします。

(2) 世論調査

それからもう一つは、皆さん方がどうお考えになるか、ご意見をお伺いしたかったのですが、世論調査があります。消費税の引き上げに賛成か、反対かと聞くんですが、ただ、「消費税、やむを得ないでしょう」という人が1人いて、それからもう一人は、「いま、政治が悪いせいでとにかく大変な窮乏にあるんだ。そのうえに消費税なんて、とんでもない」と。いわば質的な問題。

どの程度積極的に、どの程度切実かという問題も入れてあれしないと、いまいったように、「消費税、やむを得ませぬ」という1人と、それから、「消費税なんかなくて……。いま政治が悪くてこれだけ苦しんでいるんだ」という人と、同じ一人一人で今後判断できるのだろうか。その辺は非常に難しいのですが、今後、消費税の問題を判断するときどういうふうにして考えなきゃいかんかということは、前々から切実に思っております。

(3) 非課税項目

それから、最後が、いままでの消費税の引き上げというのは、3%、5%、全部非課税税目とかいうのはいじらなくてやったのですが、率が高くなってくると、皆さん方、だれも非課税品目、食料品を非課税にするとか——実は先ほど

の政府税調の答申も食料品は非課税ということになっているのです。ただ、いまの消費税は、とてもそこまで手が回らなくて非課税になっていないんですけど、だけど、これを10%、引き上げるといふことになると、その辺を考えなきゃいかん。

私は、税の専門家でないのでよくわからないのですが、これが結構大変なことじゃないかなと。いまの率を引き上げるだけの話ではないのではないかと、というような話があります。

以上、総合いたしまして、これはなかなか大変だ。しかし、また必要だということも強調しておかなきゃいかん。先ほどいったみたいに、私の考え方は、中国が原因なんかで世界的にデフレ状況なので、これが一番困るのですが、物価が大きく上がるのはよくないのですが、2~3%とか3~4%上がってもらって、それで残高が実質上限になるということが期待できないと、消費税だけで財政再建というような話はなかなか大変だなという感じでございます。

以上、申しあげまして、あと、皆さん方からご質問があったら、それをお受けしたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。(拍手)

質疑応答

司会（倉重篤郎企画委員・毎日新聞論説室専門編集委員） どうもありがとうございました。素晴らしい大平ヒューマンドキュメントをお聞き出来たと思います。

私のほうから1つ、2つ質問させていただきます。大平さんが3つの十字架を背負っていた。これは日中国交回復と、それから核の密約、それと消費税。どちらかというところモラリティーの高い政治家として、そういう倫理的なものを非常に感じるのです。これは大平さんの無教会派クリスチャンという政治家としての生きざまに非常にフィットしているというか、それがなければ、なかなかそこまで思い込まないのではなにかと思うんですが、その他、田中角栄さん、

ほかの政治家の方がいっぱいいらっしゃったわけですね。その中で大平さんだけがそういう問題意識を強く持ち続けられた。その辺の違いは……。

「大平君は政治家ではない。宗教家だ」

森田元秘書官 この辺のことは、田中角栄さんの一言に一番よくあらわれている。「大平君は政治家じゃないよ、宗教家だよ」と。政治家として大政治家とはとてもいえないと思います。ただ、人間的にどうかというと、私は非常にほれ込んでいるし、すばらしいと思うのですが、一番政治家としてはどうかと思ったのは、大平内閣ができたときに、親しい記者の人が、「大平さん、総理大臣になったら死にますよ」ということを何人もいわれたのです。ということは、風貌に似合わず生まじめなところがあるということを感じておられたのだらうと思います。以上です。

司会 一般消費税をおっしゃるときに、そのときの大蔵省の事務当局はどの程度の準備と協力を……。多分、彼らの相当な悲願でもあったと思うんですけど、その辺の印象としては何か……。

森田元秘書官 世間的には事務当局は大変喜んだことは事実なんですけど、私が大蔵省の派遣の秘書官ですから、私を通じて全部総理のところへ上がるのですが、事務当局のほうから「一般消費税をやってくれ」とか、話は聞きましたけれども、積極的に勧めたことはありません。どっちかといえば、選挙をやるのに、消費税をやって、大平さん、本当に大丈夫かなということを、大平自身よりも余計に事務当局のほうに心配していたという、そんな感じですよ。

司会 それから、解散総選挙で大敗して、それは消費税が原因だったと思うのですが、その後の立て直しみたいなことは、その後、四

十日抗争に入って、それから1年たたぬ間にお亡くなりになるわけですね。その間に、消費税について、どうやってまた立て直したらいいかという議論はありましたか。

森田元秘書官 そこまで全く余裕がありません。

司会 森田さんがその後ずうっと政治家を続けられて、なぜ竹下内閣でこれがうまく導入され、成立したのかということについては、何か……。

森田元秘書官 後の大平内閣と中曽根内閣の売上税と竹下内閣の積み上げがあったということ、それから竹下総理自身の、内閣退陣と引きかえに消費税を成立させるという決断があったと思います。

竹下総理に感謝しておるのは、消費税が成立した後に墓参をしていただきまして、「こういうわけで大平さんが念願しておった消費税が成立しました」ということをご報告していただいて、そのことは私も感謝しております。

司会 わかりました。

では、会場の皆さんから質問を受けたいと思うんですが、どうでしょうか。昔の話でも結構なんですけれども。核密約の話でも結構でございますけれども、いかがでしょうか。

質問 きょうは消費税のお話を中心だと思えますが、外交のことを森田さん、それから大平さん、ライシャワーさんの時代など、非常に関係が深かったと思いますので、伺いたいと思います。

いま、いろんなことが問題になっている。普天間のこともそうであり、沖縄のこともそうでありますが、そういうときに、大平さんの、ライシャワーさんのお話など、きょうは大変有意義に伺ったんですけれども、私が考えますに、アメリカ側と話をするとときに、アメリカ側とど

ういう信頼関係を築くかということが非常に大きいんじゃないかというふうに思ったことが一つ。

それから、逆に、これは非常に計算づくの話になるかもしれませんが、アメリカ側は、日本の政権としての安定度みたいなものをどこかでみているんじゃないか、計算しているんじゃないかというようなことを思うんですが、その2点について、何かコメントをいただければと思います。

森田元秘書官 全くおっしゃるとおりでございます。信頼関係が大事だということで、私は、前々から、総理大臣の、半分以上、場合によっては7割ぐらい外交がウエートを占めるというふうに思っております。ということは、首脳外交、カーターさんとの話でも、あれだけ信頼関係があるということは、首脳同士であったから可能だったので、例えば周恩来さんと大平外務大臣は実質上、日中正常化をやりましたが、片方が総理大臣であり、片方が外務大臣であると、首脳間の信頼関係ということはなかなか成立しないという問題もありまして、総理大臣というのは、そのところが大事だということです。

菅首相夫人の本に愕然

私、ちょっと愕然としておりますのは、菅伸子さんが最近、本を出しまして、大抵は無難なことを書いてあるんですが、一番ひっかかりましたのは、「うちの主人は外国に全く関心がないんだ」と。まあ、それは市民運動をやっておれば、ないかもしれませんが、総理大臣だと、5割以上、7割ウエートを占める外国に関心がないと、まあ、「外交」とは書いてないんですが、外交にも関心がないというふうにとれますし、そのところはちょっと問題だなというふうに思いながら読みました。

それから政権の安定度というのは、日米関係だけでなく、すべての国がお互いの政権について安定度をはかりながらあれしますし、それ

から外務省なんかで議論しますと、あの国の安定度はどうだということは相当露骨に議論、出ますから、ある意味で当然のことだというような感じがいたします。

質問 いまの消費税の問題というよりか、財政均衡というのを国としてどう考えるのか、政治家としてどう考えていくのかということで、結局、昭和 58～59 年ぐらいで日本は 10 兆円税収不足、財政が均衡してない状態があって、その後、減税を 6～7 兆円やったり、そういうのをやって、結果的にいま 25 兆円以上になっていると思いますけれども、ところが、30 年間成長でもって必ず税収が上がっていくんだ、最近の論調は、今度は物価上昇で税収が上がっていくんだと、経済の論理からすると、極めて希望的、楽観的なそういう物の考え方で——まあ、新聞の論調もそうですけれども、経済学者たちもそういうことをいっていますし、政治家の人はそれに乗っているのかもわかりませんが、そのところを政治家としてどう考えていくんだという、そういう立派な方は、いまの政治家の中にはいらっしやらないんでしょうか。

経済の天才がいなくなった

森田元秘書官 ちょっと難しい話なんですけど、おっしゃる意味はよくわかります。そのところの経済について、これは答えになるかどうかわかりませんが、私が皆さん方に申しあげておるのは、経済は、いままで天才が後ろにいたと。アダム・スミス、それからマルクス、ケインズ、フリードマン。いま、フリードマンが批判されているのです。いわゆる竹中・小泉ライン。この批判も当たっていますけれども、それでは、天才なき時代に確固とした経済政策、考え方というのはできるのだろうか。

例えば、小泉さんは竹中さんに任せておりましたが、竹中さんはフリードマン一辺倒で、それはそれで趣旨が一貫していたんですね。今後は、果たしてそういう趣旨一貫するような経済政策ができるのかということは、私は非常に不

安を持っております。

自民党の人にそういうことを話しますと、「いや、おれがやるんだ」という人もおりますが、「それは天才じゃなくては無理でしょう」というようなことをいったこともあります。

おっしゃる意味はよくわかるので、どういう経済政策でこれからいくかということは非常に重要だし、私もそのところはじくじたるものがありまして、いまバッジをつけておりませんが、何年か前から、地元の会合で集まるときには、長らくバッジをつけておった者として、皆さん方にまことに申しわけない事態になってきているんだということで、謝っておりますが、いまご質問のあったような感じが私もあるものですから、謝っておるということでございます。

質問 いまの参院選以来の結果を受けて、菅内閣のやろうとしている消費税率の引き上げ、議論をしていこうという話ですけれども、これがかかなり雲行きが怪しくなってきたわけですが、今後の議論の展開というか、先行き、実際には引き上げというのが可能なのかどうかというのをどういうふうに見ていらっしやいますか。

森田元秘書官 消費税のお話だけでなく、私の持論は、細川、羽田内閣のごく短期間を除いて、昭和 30 年の保守合同以来、自民党は 56 年、政権の座にあったんだ。だから、政権交代して民主党になった以上は、少なくとも 5 年や 10 年はちゃんとやってほしいということで、私は、最初の 1 年、2 年とかいうのは、労働組合の問題、いろんなマニフェストの課題問題もあるんですが、まあ、何とかやってくれるんじゃないかと思っておいたら、普天間の問題その他で傷つきまして……。

普天間の問題は、私は、鳩山内閣が成立したときに家内に「1 週間しか期間がない」と。1 週間の間に、自民党の政策は引き継がないけれども、普天間だけは自民党なので行くんだということで、自分が決断して、かつ、あとの 1 週間か 10 日で小沢一郎さんを説得して、小沢さんも納得して、福島瑞穂さんは時間をかけてやる

んだけど、これは「うん」といいませんから、場合によっては連立離脱もやむを得ないとあの時点で決断しておれば、福島さんも連立離脱しなかった。まあ、党首選もありますからわかりませんが、少なくとも普天間の問題は、いろんなマニフェストの課題があっても解決していたんじゃないか。それが非常に残念なんです。

小沢さんは国のこと虚心坦懐に考えて

いずれにしても、民主党は山のように問題を抱えておまして、党内の問題で一番希望するのは、一番力を持っておる小沢さんが国のためにどうするかということを実際に真剣に、虚心坦懐に考えていただくということが何事よりも大事なことで、消費税の問題もそうなんです、みんながなかなか思うこともいえないのは、結局、小沢さんが怖いからなので、小沢さん自身が、私が申しあげたように、少なくとも民主党が5年や10年はちゃんとやらなきゃ日本の国はもうダメなんだ、それは責任だ、というようなことでやっていただかなきゃいかん。それがもしできないということであれば、なかなか消費税の問題もうまくいかないでしょうね、というのが私の答えでございます。

質問 日本は1990年ぐらいから、ザッと45兆円ぐらいGDPが少なくなっておりますね。これはオランダ一国のGDPぐらいのスケールですから、実は大変な事態になっている。これについて、どういう政策でこういう困難をブレークスルーするかということが、壮大な構想力、それからその裏づけのある新しい基本的な考え方、いわば経済哲学というか、国家運営、そういう基本の問題があまり語られてないんですね。

菅さんの消費税については、私は啞然としました。あの人の数字の根拠はよくわかりませんが、貧乏な人、200万、400万、そういう人には還付するといっていますね。でたらめな話ですね。この人は総理としての器じゃないと僕は

思っているのです。

さっきいったオランダ一国のGDPぐらい減ったものになっている。最近、ちょっと上がってきているという部分もありますけれども、基本的な問題をどうやって対処するかという構想力が非常に欠けているんですよ。

いまの民主党の政治をみていると、ユーゲントといいますか、青年団の若い衆がいろいろカッコいいことをいっているということで、全体の構想が私には響いてこないんですね。消費税の問題も絡めて、どういうふうにこの難局をお考えになっていらっしゃるか、お伺いしたい。

森田元秘書官 おっしゃるとおりで、これはなかなか大変なんです。一つは人口減少社会になるんですね。何年前かに人口減少社会もいい点があるんだという本が2~3冊出ましたが、それはいい点もありますけれども、大変な事態であることは間違いない。

それからもう一つは、言葉が軽いという問題もありますし、それから大きな構想力を持って、そして対処していかなければ……。ただでさえ難しいんだけど、民主党というところで大変厳しいなという気がするの、例えば、いまは消費税だから、まだいいんですが、安全保障なんかを——石破茂さんとか何か専門家が——問題に考えて、安全保障の論議を党内でやると、党が分裂するかもしれないというような雰囲気は、これまた政権担当者としては非常に問題じゃないかなと。

その別の形がいまの消費税であらわれているんですが、安全保障の点は、小沢さんが横路孝弘さんといろいろ話し合っただけでああいうふうになっている。それにしても話し合わなければならぬような状態でもあるし、それから公然と一般の人たちを集めて議論がしにくいというようなところが政権を持っているのですから、よっぽどの覚悟と、それから勉強と構想力を持ってやっていただかなければ大変だなと。おっしゃるとおりだと思います。

質問 一般消費税導入のときの話なんです

けれども、先ほど欧州型付加価値税について言及されましたが、当時、日本がEUの中で——EUがいま、20%ぐらい普通にある状態になっていますけれども——モデルにしようとしたような国はありますか。

それからEUの各国で15%、20%、あるいは25%という付加価値税がいまも設定されて、上がる方向に行っているのに、ヨーロッパでは成功して、どうして日本ではここまで成功できなかったのだと思われませんか。

森田元秘書官 私、税の専門家じゃないので、ちょっとよくわからない点もあるんですが、一つは、戦後のシャープ勧告以来の我が国の税制が、直接税中心主義でずうっと来ていて、伝統的に直接税中心主義なんです。それを、途中から間接税を重視しなきゃいかんというふうにあれしているんですが、主税局の体質そのものが直接税中心主義にずうっと染まっているという点があると思います。

それからもう一つは、大平内閣では技術的な点は全く入っておりません。選挙でクリアしなければ、技術的な点を詰めても、ある意味で意味がないし、逆にいうと、そういうのが外に漏れると足を引っ張る結果になりますから、国民がわかってくれるか、くれないかというところで、大ざっぱな話で進んでいったというのが実態でございます。

質問 モデルにしようとした国というのは……。

森田元秘書官 政府税調の話は、私もよく知らないんですが、答申は出ておまして、その辺の話は10日に野田毅さんが来て、野田さんは党税調ですけども政府税調の話もよく勉強しているので、その辺で聞いていただければ、細かくわかると思います。

質問 いま、森田さんのお話を伺っていますと、大蔵省でしっかり勉強というか、基礎がし

っかりしていて、それから政敵というか、政治の世界で戦った相手も、例えば福田さんにせよ、みんな同じような基礎があって、日本のことを思って……。

それで、善幸さんが総理になってすぐのとき、アメリカへ行って、帰ってきてすぐ日米関係がガタガタになって、伊東正義さんがやめたとき、安倍晋太郎さんが懇談でこういうことをおっしゃったんですね。「総理になったら考えることは、日米関係のことだけ考えればいいと岸から教わった」と。やっぱり天下をとろうとする人は、そういう常識、そういうつもりで勉強もしたり、それから派閥でしごかれたり、いろいろして、大臣を経験して、総理をやった。

それに対して、いまの政権をとっている人たちというのは、何にもそういうことを考えたことがない、「うちの主人は外国に関心ないです」なんていう人がポツと総理になって、それで、政権をとったからには5年、10年やってほしいといっても、素養がない人がどうやってこれからやっていくのか。

多分、次の衆議院選挙まで3年あるんじゃないかと思う。その人たちが政権をこうやってとっちゃった以上、どうしたらいいと思いますか。

司会 非常に難しい問題ですから……。

大きな政界再編はあり得ず

森田元秘書官 難しい問題ではあるんですけども、ある意味では単純明快なのです。実は2つありまして、1つは、世の中、あるいは自民党、民主党の人たちの中にも、一つの期待は、民主党がだめになっても、自民党がいるんじゃないかというんですが、もう10年ぐらい前から加藤紘一さんと話をしている、「今後、いったん下野したら、半永久的に自民党は戻らない」と。それはそのとおりだ。加藤紘一さんのは政界再編が頭にあって、そういうこともいついたのだろうと思うんですが、私は大きな政界再編はないと思っています。これは確信しているのです。

というのは、例えば鳩山一郎自民党ができたときに、児玉誉士夫が、いまの時価にして 150 億出しているんです。それは児玉機関という、怪しげな金だけれども、しかし、150 億ポンと出している。

それと対比するのに、鳩山由紀夫さんと鳩山邦夫さんが民主党をつくったときに全部で十何億出したんだけど、全部は回収してないんですが、政党助成金から回収しているんですよ。

私ที่บ้านにいったのは、「私があ当事者だったら一切回収しない。2 人とも少なくとも 250 億ずつ資産を持っているんですから、250 億資産を持っていて回収するようなことを私だったらしない。政党助成金をちょっとでも回収したら将来の政界再編はないということだよ」ということをいっておって、それはもう確信しているのです。

もう一つは、金丸信さんが四十数億持っていて、これは政界再編のために使うと信じていて、本当にそうかもしれませんが、最近、金丸さんと親しかった人に聞くと、「それは、政界再編のために使うということも一部あったかもしれんけれども、少なくとも全部じゃなかったんじゃないか。もしそうだとしたら、金の延べ棒なんかしませぬね」といわれて、なるほど、それはそうかなと。

ということは、政界再編というのは、憲法改正に賛成かどうかという主義主張もまともでないんですが、また同時にお金の面からもそんなに簡単にまともでないというのが、私の、ほとんど確信に近い。

司会 いまの延長線上でいいますと、やっぱりお金のパワーというのは非常にわかりやすい指標だと思うんですね。だけど、まだ政界には持っている人がいると思うんですよ。

森田元秘書官 持っている人はいるけれども、出す人がいるかどうかなんですよ。

司会 例えば小沢一郎さんはいかがですか。

小沢さん、先ほどの話で……。

森田元秘書官 小沢さんも、出すことを期待するんですけど、本当に出す気だったら不動産は買いませんね。すぐ処分できるような資産で持っているはずですよ。本当に政界再編のために使おうと思ったら、無記名債権か、あるいは預金かで持っているはずだと私は思っているのです。本当に出すつもりの方は、大平がもしその立場にあったら、すぐ流動化できる、やっぱり預金でしょうね。

司会 せっかく出た話ですけど、小沢さんに対する評価というのは——大平さんは、ご生前のときには、まだ小沢一郎という政治家なんていうのはほとんど出てこないですね。

森田元秘書官 あまりよく知らなかったですね。

司会 だけど、その後、森田さんが 8 期の政治生活をする中でみてきた小沢一郎観みたいなのはございますか。

森田元秘書官 小沢一郎観は、一言でいうと、大変な能力の人で、田中内閣の幹事長をやってから今日まで生き残ってきているというのは、大変な能力なのです。だから、逆にいうと、そういう大変な能力のあった人が国家のことを真剣に考えてもらわないと、この国はうまくいかないというふうに思っているのです。民主党の問題というよりは、小沢さんの問題だと思っている。小沢さんは、人がどうこういって聞く人じゃありませんから、自分がそういう覚悟を決めて、それで思い直してというか、とにかく新しい覚悟を持ってやってくれるかどうか。小沢さんがやらなきゃ、民主党はなかなか難しいなという感じですね。

司会 大変な能力というのは、どういう能力ですか。金集め能力以外で……。

森田元秘書官 金集め能力もありますが、生き残ること自体が……。それで政権にありついたのですから。

司会 結果論ですね。

森田元秘書官 結果論。そうそう。いわゆるけんか別れで出たんですけれども、その後、政権をとるところまで行ける人というのは非常に少ないと思いますよ。おそらくほかの人だったら無理だと思います。大平も無理だったし。大平がああいう立場にあったら、途中で政治家をやめているか、とても政権復帰のところまで行きませんか。とつても行かない。

司会 最後の質問にしますけど、森田さん、この先の政局をにらんで、例えば谷垣派の人たちにアドバイスするとしたら、解散総選挙の時期はいつごろだというふうに……。

森田元秘書官 解散総選挙の時期は予測できませんし、それは最重要問題じゃなくて、自

民党の最重要問題は、谷垣禎一さん、物足りないので、私も「あなたは、ちょっと迫力、不足している」ということを何回も直接いったこともあります。しかし、谷垣さんが総裁になった以上は、みんなで谷垣さんを助けて、それでやっていけるかどうかということが日本の国の政治にも非常に重大な問題だということで、特に他派の人にはそういう話をしていますが、なかなか私の影響力がなくて、やっぱり批判が続いていますけれども。そんな感じですね。

解散の時期はちょっとよくわかりません。それは、“バカヤロー解散”みたいな話が典型的ですが、思わざるときに思わざる解散になりますから、あらかじめ株価の予測が難しい以上に難しいと思いますね。

司会 わかりました。

ほかにご質問がなければ、これで終わりたいと思いますが、よろしいでしょうか。どうもありがとうございました。

(文責・編集部)